



図の現在からは、「いつもしてくれる」「ときどきしてくれる」を合わせても、小学生55%，中学生66%，高校生64%にしか

なりません。小学生の意識が少し低いのは、社会性がまだ確立されていないからではないでしょうか。

将来への向上心を高めるためには、所属と愛情は大切な欲求なのですが、今後への期待も、小学生・中学生・高校生とも、さほど小さくなく、あきらめともとれる意識が伺われます。

これらの実態をふまえ、どのような指導援助の方法があるか、その在り方を事例を通して考えてみましょう。

## ◇◇◇◇所属感を育てる指導援助の事例◇◇◇◇

事例は、中学校1年生を対象に、学級担任が行なった「所属感を育てるための指導援助」の報告です。

### 実践の前に

X市郊外の中規模校1年生36名を担任するA先生(34才男子)は、問題行動に対する今までの対症療法的指導援助は、教師にとって避けて通れないものとあきらめつつも、何か本来の教育を忘れていたような寂しさがありました。

そこで、今までの学級を見つめ直したところ、次のようなことが感じられました。

- 今までの指導援助でも、確かに問題行動は改善することはできた。
- 教科担任からは、静かな雰囲気、授業がしやすいと言われることが多い。
- リーダーは、担任の指示通りに進めても

級友からの反発は少ない。

- 問題としては、学級全体の成績が思うように向上しないことであるが、学級の雰囲気の原因があると考えられる。

このように見ると、特に問題のない学級のようなのですが、次のような課題が存在することにも気がつきました。

- 何も問題のない学級にすることが学級経営の最終目標ではなく、一人一人の生徒の能力をより高めてやる必要があり、そのためには学級全体を客観的に把握する必要があるのではないか。
- 静かな学級というのは、中学校1年生の段階で喜ばしいことなのだろうか。あまりにも担任として縛り過ぎていないだろうか。学校行事のクラスマッチになぜか燃えないことから、学級の成員としての一人一人の所属感を高める必要があるのではないか。